## ボルツァーノでの研究生活

Eurac Research, Institute for Biomedicine

## 藤井 亮輔

(藤田医科大学医療科学部予防医科学分野)

私は 2021 年 10 月よりイタリア北部の都市ボルツァーノにある Eurac Research という研究施設で在外研究をしております。

ボルツァーノは、トレンティーノ・アルト = アディジェ州にある地方の中核都市で、人口は約 10万人です。北側には 3,000m 級の山々が聳え立ち風光明媚な街であることから、国内だけでなくドイツやオーストリアからも多くの観光客がやってきます。実は、私の出身地である岐阜県多治見市も人口 10万人の都市であり、また周りを山々に囲まれた盆地であることから非常にシンパシーを感じる場所です。

さて、私の所属する生命医学研究所(Institute for Biomedicine)には、約70名の研究者が様々な研究課題に取り組んでいます。とりわけ、受け入れ先である Dr. Cristian Pattaro が率いる Biostatistics & Epidemiology グループでは、13名の研究者が生物統計学、疫学、バイオインフォマティックスなどのプロジェクトを走らせています。私自身は、ゲノミクスと疫学、生物統計学を融合し、慢性腎臓病(CKD)の原因遺伝子を発見することを目的として研究に従事しています。イタリアに来て半年が経過したばかりですが、すでに CKDGen consortium をはじめとする世界トップクラスの研究者との議論や UKBioBank など貴重な研究資源へのアクセスという点で実りある研究期間を過ごしています。

こちらに来て感じる研究スタイルの大きな違いは、1)議論を活発にすること、2)研究に携わる全ての人を尊重すること、3)研究も生活(人生)の一部であること、です。まず、議論をすることに関しては、日本国内でも三者三様だと思います。しかし、こちらでは各人が過去の研究経験を惜しみなく共有し、必要があれば個人的に短い会議をすぐに行なう光景をよく目にします。このように、気軽にコミュニケーションを取って進めるスタイルには感銘を受けています(イタリアならでは、なのかもしれませんが)。また、研究業務(研究費や研究スケジュールの管理)に関わる事務スタッフや研究者がみな対等な立場で自然と発言できる雰囲気もあります。これには、文化的な背景も関係していると推察されますが、お互いがお互いの仕事に集中し研究を円滑に進める最良のスタイルだと感じています。最後に、研究者も1人の人間であり、それぞれの人生のピースとして研究を選んでいることを節々に感じます。この考え方は、在外研究終了後にも私のキャリア観に大きく影響を与えるものと確信しています。

末筆ではありますが、世界では未曾有の感染症の流行や非情な軍事的侵略に直面している中、自分がやりたい研究を無事に行えることに、家族をはじめとする関係各位に心から感謝申し上げます。特に、このような機会を紹介して頂きました名古屋大学大学院の菱田朝陽准教授、快く送り出して頂きました藤田医科大学医療科学部の鈴木康司教授、多大なるご支援賜りました上原記念生命科学財団には改めて深く感謝申し上げます。



ボルツァーノ市内の様子